



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本近代文学におけるフランス
Author(s)	神谷, 忠孝
Citation	北海道大学人文科学論集, 24, 57-82
Issue Date	1986-03-17
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34385
Type	departmental bulletin paper
File Information	24_PR57-82.pdf



日本近代文学におけるフランス

神谷 忠孝

はじめに

横光利一は「純粹小説論」(「改造」昭和一〇・四)のおわりところで、「日本文学の伝統とはフランス文学であり、ロシア文学だ。もうこの上、日本から日本人としての純粹小説が現われなければ、むしろ作家は筆を折るに如くはあるまい。」と書いている。明治以来の近代文学が圧倒的な外国文学の享受のもとに歩んできたことへの率直な感想であり、近代文学発生以来、半世紀を経た時点での発言としてもっともである。ここに省略されているイギリス文学、アメリカ文学、その他のヨーロッパ文学を含めて、日本に紹介された外国文学の数は、翻訳史(国立国会図書館編『翻訳文学目録』風間書房)をみるまでもなく膨大である。とりわけ昭和期には、東京大学仏文科で辰野隆に教えを受けた小林秀雄、三好達治、中島健蔵、中

村光夫などが文芸界の若手として活躍しはじめていたし、石川淳、坂口安吾、太宰治、武田麟太郎などという典型的な昭和作家は、いずれもフランス文学の影響から出発している。さらには、ドストエフスキー、シェストフなどの流行もあって、横光利一の意見がでてきたわけである。

本稿では、開国以来の日本が接してきた諸外国の中からフランスに焦点をしぼり、翻訳文学とは別に、実際にフランスの地を踏んだ文学者、思想家の足跡を年代順にたどり、日本人の中にフランスへの憧憬がどのように培われてきたかを昭和十年代までたどることにする。文学史のうえでは永井荷風のフランス体験が大正期のフランス熱を触発し、昭和に入ってから円熟の域にまで至る経過は、そのまま日本近代文学の歴史と重なっていることがみえてくる。その頂点に立った作家が横光利一であり、昭和十一年の半年余のフランス体験は横光利一にとって衝撃であった。その衝撃から立ち直るためにも、

横光は西洋と東洋の相克というテーマに取りくまざるを得ず、壮大な失敗作と言われる「旅愁」(昭和一二〜二二)に作家としての全精力を傾注して倒れたのである。

第二次世界大戦(一九三九)の勃発によって戦前の「洋行」は中断されるが、フランスへの憧憬は戦後になって、戦前にもまして高まりをみせる。再開された「洋行」は、一九五〇年になって遠藤周作が七月にカトリック留学生としてリヨン大学に二年半学ぶのをはじめとして、同年、三十八歳の森有正がフランス政府給費留学生としてフランスに渡る。七年後の一九五七年に渡仏したのが辻邦生であるが、船で渡航した最後の人である。一九六九年にはフランス郵船欧亜航路が廃止され、事実上の「洋行」はこの年をもって終わった。ジェット機で飛ぶようになってからは「洋行」という語は実感をもたなくなったようである。欧米へ渡航することを意味する「洋行」という語が中国大陸や東南アジアの渡航に使われないのはなぜかという問題は、それ自体、日本のアジア観と深く関係していると思われる。

戦後の文学者、思想家の中でフランスとかかわることで思想を深化させたのは森有正と辻邦生であろう。この二人がフランスと出会うことで何を得心したかについて、簡単に解説しておこう。

昭和二十五年、フランス哲学を深く学ぶためにフランスに渡った森有正は、八年後に出版した『ペピロンの流れのほとりにて』(昭和二三・一、講談社)のはじめの方で、「僕はこの文明からかえりみられず、その中から棄てさられる運命の可能性を考え、覚悟した上で

なければ、この文明と接触することはできないのだ。僕ははじめてマルセイユに着いた時、このことを予感していただろうか。だからあんなにバリに行くのが恐ろしかったのだろうか。文明というものは人間の生きる高い道で、外側から見物したり、利用したりすることができるものではないのだ。それは一種の恋愛関係だ。文明を自分のものとし、同時に自分も文明のものになるということだ。」と書いている。

ここで注目されるのは、「個」としてフランス文明を受け入れようとしている態度である。戦前の洋行者のように国家を背負うという気がまえを最初から捨てている。だから「棄てさられる運命」にたち至るかもしれないという覚悟を持つとうとする。そうしなければ文明を自分のものにできないと言っているのである。もう少し先の文章で、ヨーロッパの生活を通して、「我々自身の生活の中にそれがどう現われてくるかが根本的に大切であり、それなしには思想も亦ありえないからである。ヨーロッパ的思想に対してアジア的思想を対置することが馬鹿げているように、思想はそれを生み出した生活から抽象的に切りはなすのも根本的に間違っている。」とも述べているが、ここには戦前の洋行者の二の舞は踏むまいとする覚悟がある。

さらに、パリ生活二十年を越えた時期に書かれた『パリだより』(昭和四九・一、筑摩書房)の中では、日本人の留学の意味が、戦前では、いわゆる先進国の文明を摂取することにあつたが、戦後ではヨーロッパ文明と日本文化の相違が、先進後進という進歩の序列の相違ではなくなり、二つの文化の在り方、文化の質の違いを学ぶ

ことに比重がおかれるため、一昔前に比してはるかに困難が増してきたという感想を述べている。

辻邦生には『パリの手記』全五冊（昭和四八・七・四九・四、河出書房新社）がある。パリ留学の目的を作家修業においた辻邦生はパリでの生活を『経験』にすべく克明に書いている。この方法は森有正に学んだことはたしかで、七年おくれでパリの生活を始めた辻邦生は、森有正が哲学でなそうとしていることを文学で実行しようとしたと言える。辻邦生の「ある試みの終り——コスモポリタンとエトランジェ」（『国文学』昭和五五・六）には、一九五七年の秋、パリに着いてまもなくカルティエ・ラタンの坂道を森有正が歩いているのを見たときの「感動」について書いている。そして、西欧精神の核心に自分を埋め込むようにして迫った森有正は、日本の知識人の系譜の中では「特殊な人間」かもしれないが、そうした特殊な経験を通過したことで、日本人でも外国人でもない「人間」になったと説明している。つまり、真の意味でのコスモポリタンを森有正に見出している。一九七六年（昭五一）に亡くなった森有正の評価を辻邦生がどのように展開するかはこれからの問題である。一九六一年五月に開催された「今、フランス文化とは——日本人の視点から」というシンポジウムで、発言者の一人辻邦生は、日本におけるフランス文化の意味について、森有正を中心に発言している。（注1）

加藤周一は辻邦生より六年早い昭和二十六年十月に渡仏し、医学研究に従事するかたわらフランスを中心にヨーロッパ文化に対する見聞を深め、長編「運命」（『群像』昭和三一・一〜四）で、ヨーロッパ

パ文化の強固な統一性に圧倒されて没落してゆく日本人画家を描いた。以下、主としてフランスを舞台にして、日本人にとってのヨーロッパ文化の問題をテーマにした小説には、遠藤周作の『留学』（昭和四〇・六、文芸春秋新社）、中村真一郎の『雲のゆき来』（昭和四一・五、筑摩書房）、辻邦生『夏の砦』（昭和四一・一〇、河出書房新社）、立原正秋『帰路』（昭和五五・二、新潮社）などの問題作がある。これらに共通するのは、横光利一の「旅愁」を視野に入れていることである。批判するにせよ共感するにせよ、横光利一が提起した問題を内部で深く受けとめようとしている。その意味でも、「旅愁」に至るフランス文化の受容史をたどることは重要である。数人の文学者に焦点をおくかたちで概観してみる。

一 幕末、明治初期の渡仏

幕末から明治初期にかけての日本とフランスの交流は実学をもつて出発する。安政五年（一八五八）から文久三年（一八六三）まで蝦夷地の箱館に在住した栗本鋤雲は、文久三年（一八六二）に箱館奉行組頭となって、カラフト、千島などの長期調査にあたる一方、安政六年に箱館に來住したフランス人宣教師メルメ・ド・カシヨン（のちに仏公使レオン・ロッシュの書記官）と長期にわたって日仏語交換教師を続け、その際の西洋事情問答を『鉛筆紀聞』（明治二・九、潜館蔵板）にまとめている。この因縁から、文久三年に江戸に召喚されてのちは幕府の親仏外交の第一線に立つことになった。翌元

治元年（一八六四）、フランス技術の導入による横須賀造船所、製鉄所の建設を成就し、慶応元年（一八六五）には横浜に仏国語学所を開設した。慶応三年（一八六七）六月、外国奉行に勘定奉行格と箱館奉行を兼任して渡仏、パリ万国博の日本代表をつとめたりしたが、幕府瓦解の報に接して明治元年九月に帰国した。

帰国後は小石川礫川に隠棲してフランス体験記『暁窓追録』を執筆し、明治二年、他の随筆とともに『菴庵十種』として刊行した。

『暁窓追録』は文学作品として書かれたものではないが、パリの文物、特にガス燈、上下水道、動・植物園、博物館、公園、ホテル、汽車、電信、道路整備などについて書いた見聞記は、私塾を設けて漢学を教授したことのある人にふさわしい、正確で気品のある文章である。また、外交官としてのすぐれた国際感覚が発揮されている。栗本鋤雲の文章は筑摩書房刊「明治文学全集4・成島柳北、服部撫松、栗本鋤雲集」（昭和四四・八）によって読むことができる。この栗本鋤雲の晩年の門下生の一人が島崎藤村である。

明治四年から七年にかけて実施された岩倉使節団のアメリカ、ヨーロッパ巡回に関連して重要な人物がうかがわてくる。その一人は中江兆民（一八四七～一九〇一）である。慶応元年（一八六五）、十九歳のとき土佐から長崎に留学してフランス語を学び、明治維新後は箕作麟祥の塾に学び、また大学南校でフランス語を教えていた中江兆民は、明治四年司法省に出仕し、岩倉具視全権大使一行らと横浜を出航、アメリカを経由してフランスに留学、リヨン、パリで勉強し、明治七年に帰国している。帰国後は仏学塾を開き、ルソー

の社会契約論はじめ、フランスの自由主義、民主主義思想を教授した。

成島柳北（一八三七～一八八四）は明治五年九月から翌年の六月にかけて、東本願寺法主大谷光瑩に随行してフランス、イタリア、イギリス、アメリカを漫遊し、このときの紀行はのちに『航西日乗』（『花月新誌』一一八号～一五三号、明治一四～一七）として発表された。その中のパリの劇場、名所旧蹟等の描写にみるべきものがある。柳北がパリ滞在中の明治五年十一月十六日、岩倉使節団がパリに到着、一行のなかに福地桜痴がいた。当時の駐仏公使蛟島尚信のもとで書記官をつとめていた長田銈太郎は仏語伝習所の伝習生出身である。また、栗本鋤雲の養子貞次郎も留学生としてパリに滞在していたし、柳北の養子で長田銈太郎の実弟である謙吉も明治六年四月、パリに到着した。

明治十一年に刊行された久米邦武編『米欧回覧実記』における欧米見聞記のみごとさについては芳賀徹の「日本人と異国体験——『米欧回覧実記』のアメリカ」（『国文学』昭和五五・六）が、紀行文学としてこの作品を位置づけている。

矢野龍溪（一八五〇～一九三一）は明治十七年から十九年にかけてリヨン、パリ、ロンドン、アメリカを巡り、『周遊雜記』（明治一九・七、報知社）をまとめた。代表作『浮城物語』（明治二三・四、報知社）の構想は外遊中に練られたものという。

長田銈太郎の長男忠一（筆名秋濤）は明治二十二年、十八歳のとき政治学を学ぶためイギリスに渡りケンブリッジ大学に籍をおいた

が周囲の学生と折合いがわるく、加えて街を歩くと「ジャップ」という罵声を浴びせられたこともあって、さっさとフランスに渡りソルボンヌ大学で法律を学ぶという名目で外務省留学生となった。フランスではもっぱら演劇に熱情を注ぎ、父の縁故でコメディ・フランセーズの楽屋に出入りしてフランス演劇の実情を見聞した。二十四歳で帰国した秋濤は政界、実業界で活躍するかたわら演劇改良の運動に参加し、デューマの「椿姫」(明治二九)をはじめとしてモーパーサン、ユーゴーの作品を翻訳紹介している。明治三十年には伊藤博文の欧米視察に同行し、三十二年から早大の教壇に立ち、外国演劇の翻案で演劇界に新風を送るべく努力した。大正四年に四十四歳の若さで他界したあと、遺著『図南録』(実業之日本社、大正六・七、改版『図南録』は昭和一八・七、教育科学社)が刊行され、ヨーロッパ体験とシンガポールでのゴム園経営が記述されている。

池辺三山(一八六四―一九二二)は明治二十五年、旧藩主細川護成侯のフランス留学に補導役として同行し、翌年、日清戦争が起こるや、欧州諸国の日清戦争観を「巴里通信」として、鉄崑崙の筆名で雑誌『日本』に連載して注目された。(明治二七・一一・一八―二八・六・一七、第一九〇四号―二〇九三号)。池辺三山は朝日新聞主筆として、夏目漱石、二葉亭四迷を迎えて文芸欄を向上させた人である。

幕末から明治初年にかけて蘭学、英学とともに隆盛したフランス学が衰退した理由は、一八七一年(明治四)にナポレオン三世が新興プロシアにあっけなく敗れたこと、また、中江兆民を中心とする

ルソー主義がフランス革命を想起させるということ、政府が見切りをつけたという背景が考えられる。英学に關しても、明治十四年(一八八一)十月の政変で大隈重信や福沢諭吉門下が明治政府から放逐されて衰退していった。明治政府がモデルにしようとしたのは、新興プロシアが統一しつつあったドイツである。森鷗外が留学した明治十七年は、ドイツ学が主流になっていた時期である。

二 荷風、光太郎、晶子

明治も末になって西欧をモデルとする日本の近代化が波に乗りはじめつつあったころ、フランスは実学の対象としてではなく、芸術の分野で日本人の憧憬する国となった。その端緒は永井荷風であるが、荷風より少し早く明治三十八年五月に渡欧したのが有島生馬(一八八二―一九七四)である。主としてイタリア、フランスで絵画、彫刻を学んだ生馬は、明治三十九年に米國留学の帰途来欧した兄武郎とともに欧州各地を遍歴し、その後はパリにとどまって四十三年二月に帰朝した。フランスに取材した小説として「奇遇」(「新潮」大正五・一、のち新潮社刊『南欧の日』大正五・六に収録するとき「テムブル夫人」と改題)がある。

永井荷風はアメリカ滞在四年を経て、明治四十年(一九〇七)七月フランスに渡り、翌年五月に帰国した。新潮文庫『ふらんす物語』(昭和二六・七)所収の「船と車」にパリの第一印象が次のように書かれている。

ああ巴里よ、自分は如何なる感に打たれたであろう。有名なコンコルドの広場から並木の大通シャンゼリゼー、凱旋門、ブローニュの森は云うに及ばず、リボリ街の賑い、イタリア広小路の雑踏から、さてはセインの河岸通り、又は名も知れぬ細い路地の様に至るまで、自分を見る処到る処に、つくづくこれまで読んだ仏蘭西写真派の小説と、バルナッス派の詩篇とが、如何に忠実に如何に精細にこの大都の生活を写しているか、と云う事を感じ入るのであった。

仏蘭西の都市田園は仏蘭西の芸術あつて初めて仏蘭西たるの観がある。車の上ながら自分は遠い故郷の事、故郷の芸街の事を思うともなく考えた。吾々明治の写真派は、それ程精密にその東京を研究し得たであろうか。

荷風のフランス憧憬は中学に入った頃から「理由もなく」(「巴里のわかれ」)はじまり、父の意志でアメリカ滞在中も大学の聴講生として英文学とフランス語の講座に出席して、もっぱらフランスへの夢をはぐくんでいた。右の文章は二日間のパリ見物の印象を書いたもので、リヨンの横浜正金銀行支店に赴く汽車でリヨンに向かった。リヨン滞在は半年で、一九〇八年(明治四一)三月には辞表を提出してパリに住んだ。荷風は、イブセンの「亡霊」、ブッチーニの歌劇「ボエム」、モーバッサンの小説、リッシュュパンの詩、ブルジェの短編、殊にゾラの「クロードの懺悔」などの読書によって、カル

チェ・ラタンでの生活を夢みていたのであった。(「船と車」)。いわばフランスを、思い描いていた文学的フィルターを通して見たのである。「自分は寝台の上から仰向きに天井を眺めて、自分は何故一生涯巴里に居られないのであろう。」(「巴里のわかれ」)という文章にあらわれている嘆きは、パリ滞在中を文学的フィルターを通して眺め、感じていたことを端的にあらわしている。

荷風のうちなるフランスが文学的に成熟するのは帰国してからであり、「曇天」「新帰朝者日記」「深川の唄」「飲茶」「監獄署の裏」(以上は明治四二)などにおける、明治の「文明開化」への批判がそれである。「ふらんす物語」所収の小説「雲」の中の次のような文章は、明治期に西洋に留学した日本人の実態を描いているという点で貴重であるとともに、荷風の文明開化批判の核になっていると思われる。主人公の小山貞吉は大使館に勤務し、パリ滞在三十年目の三十二歳である。

貞吉は実際、自分ながら訳の分らぬ程、日本人を毛嫌いしている。西洋に來たのを鬼の首でも取ったように得意がついている漫遊実業家、何の役にも立たぬ政府の視察員、天から虫の好かぬ陸軍の留学生、彼等は秘密を暴かれる恐れがないと見て、夜半酒場に出入し醜業婦に戯れていながら、浅薄な観察で欧州社会の腐敗を罵り、その挙句には狭い道德観から古い日本の武士道などを今更の如くゆかし気に云い囁す。一方には博士だと云う文部省の留学生が居て、その中には驚くほど勤勉篤学の人があつた。が、それ等

の人に対しては、貞吉は単に勤勉と云うだけでも、到底自分の及ばぬ事なので、妙に羨しくもあり、恐しくもあって、やはり逢う事をば此方から避けようとするのであった。

ここに描かれているのは、フランスに限らず明治期に西洋に留学して実学を学んでいた日本人に対する荷風の主観的な嫌悪の表出である。芸術家を省いているところが注目されてよいだろう。アメリカに四年、フランスに十ヶ月滞在した荷風が得たものは、市民社会における個人主義の充実と自由を愛する精神であった。以後の日本文学に西欧、とくにフランスへの憧憬という影響を与えたのは荷風である。

高村光太郎は明治三十九年二月にニューヨークに渡り、滞米一年余、父のはからいで農務省海外実業練習生に選ばれてロンドンに渡る。ロンドンではパリから来た荻原守衛と親しみ、バーナード・リーチを知って深く西洋の伝統にふれた。パリには四十一年六月から一年ほど滞在した。「出さずにしまつた手紙の一束」(『スバル』明治四三・七)は「巴里より」という書簡の形式をとって、パリ滞在中の心情を告白している。

独りだ。独りだ。

僕は何の為に巴里に居るのだらう。巴里の物凄く、CRIMSONの笑顔は僕に無限の寂寥を与へる。巴里の市街の歓楽の声は僕を憂鬱の底無し井戸へ投げ込まうとしてゐる。君は動物園に行つた事

があるだらう。そして虎や、獅子や、鹿や、鶴の顔を見て寂寥は感じなかつたか。君の心と彼等の心と何等の相通する処も無い冷やかな INDIFFERENCE に脅されなかつたか。虎の眼を見て僕はいつも永久に語り得ぬ彼と僕との運命を痛み悲しんだ。此の不自然な悲慘の滑稽を忍ぶに堪へなかつた。かかる珍事が白昼に存在しているのに、古来何の怪しむ事もなかつた人間の冷淡さに驚愕した。それだよ。僕が今毎日巴里の歓楽の声の中で骨を刺す悲しみに苦しんでゐるのは。白人は常に東洋人を目して核を有する人種といつてゐる。僕には又白色人種が解き尽されない謎である。僕には彼等の手の指の微動をすら了解する事は出来ない。相抱き相擁しながらも僕は石を抱き死骸を擁してゐると思はずにはゐられない。その真白な蠟の様な胸にぐさりと小刀をつつ込んだらばと、思ふ事が屢々あるのだ。僕の身の周囲には金網が張つてある。どんな談笑の中団欒の中へ行つても此の金網が邪魔をする。海の魚は河に入る可からず、河の魚は海に入る可からず。駄目だ。早く帰つて心と心とをしやりしやりと擦り合せたい。

寂しいよ。

(『高村光太郎全集』)

高村光太郎には確固とした日本人意識があり、白人に対して劣等感はないのだが、文化伝統の異質性を自覚させられ、超えがたい溝を実感しているのが特徴である。だからといって、国に帰れば安息が得られるとは考えはしない。少しあとの文章に次のようにある。

僕は故郷へ帰りたいと共に又故郷へ帰つた時の寂しさをも切に心配してゐる。あの脛の出る着物を着て、黴の生えた畳に坐り、SPARTAの生活から芸術を引き抜いてしまつた様な乾燥無味な社会の中へ飛び込むのかと思ふと此も情なくなる。僕は天下の宿無しだね。しかし為方がない。今、此処で費してゐる無意味の生活よりはもつと充実した一日が送れるだらう。

「僕は天下の宿無しだね」というのがいつわりのない光太郎の実感であつた。この文章と詩「根付の国」(一九一〇)にあらわれている日本人への嫌悪が、自分自身にもはねかえってくるとき「天下の宿無し」という実感がでてきたのであろう。荷風が文学的ヴェールを施して、ほとんど実感を表現しなかつたのにくらべると、光太郎の文章は、日本人の西洋体験の中では、実感を尊重したという意味で先駆的である。

与謝野寛がフランスへ向かつたのは明治四十四年十一月である。約六ヶ月後の明治四十五年五月、晶子が夫の後を追つてシベリア經由で渡欧している。晶子の帰国は大正元年十月で、寛は翌年一月に帰国した。二人の共著『巴里より』(金尾文淵堂、大正三・五)は、写真をふんだんに使った豪華本(四百六十二頁)である。与謝野寛は「明星」廃刊(明治四一・一一)のあと定職もなく、文学的に零落して晶子の文筆活動が一家を支えていた。晶子は夫に新境地を見出させるべく、自作の短歌を自書した百首屏風及び半折幅物を知人に売つて渡航費を作つて旅立たせた。

『巴里より』での寛の文章は船旅で立ち寄つた上海、香港、シンガポール、ペナン、コロンボなどの見聞記に価値がある。といつてもその価値というのは、当時の日本人旅行者がいかにアジアを蔑視していたかを証明する記録としてである。パリに着いてからは、石井柏亭や梅原龍三郎と逢つた話、歌麿の版画展の評判に対するおどろき、忠臣蔵の翻案劇「日本の誉」を観劇した感想など、日本を尺度にして、日本がパリでどのくらい知られているかに重点をおいた文章を書いている。有島生馬の紹介状をもつて晶子とロダン翁を訪ねて、ロダンが荻原守衛を激賞したことに対する感激を書いているあたりは読ませる。

一方、晶子の文章は街を歩いている人間の観察に重きをおき、フランス女性の美しさを服装の個性と文化の深さで分析し、ひるがえつて日本女性の個性のなさに気づいて、教育の必要を痛感している。「巴里に於ける第一印象」という文章は、パリの文芸雑誌『レザンナル』に発表したものだが、その批判的観察は鋭い。

自分は偶然の機会に由てモンマルトルに下宿して居る。其れが遊樂の街である事を知つたのは巴里に着いて後数日の事であつた。自分は之に由て艶冶を衒ふ或階級の巴里婦人を観察する事が出来ました。併し是れ等の仮装の天使が眞の仏蘭西婦人の代表者で無い事は勿論である。是等の賤劣なる婦人と交際する男子を仏蘭西の道徳が排斥するのは日本の其れと同じであらう。而して自分の驚く事は其等の娼婦の需用者が概ね英米其他の諸外国より来れる

旅客である事である。(中略)

併し又自分は、なぜに是等娼婦の増加を防止する運動が教育ある仏蘭西の紳士貴婦人の間から起らないかと怪しんで居る。まさか仏蘭西人は是等の放逸な歓楽を以て外国の旅客を巴里に招致しようとするのでもありませんまい。仏蘭西には誇るべき芸術、哲学、科学、及び卓絶した天然の景勝を沢山に持つて居るではありませんか。或人は之を以て仏蘭西の自由を称揚する様ですが、併し自由とは決して悪徳の異名で無いと思ひます。

(原文は旧漢字、総ルビ)

以下は日本との比較にふれ、女子教育の必要性に言及しているのだが、女性解放推進者の面目躍如である。そして、今日でも読みごたえのあるのは「伯林停車場」という詩や「伯林の一瞥」という紀行文である。これらの感覚的表現は新鮮であり、人物にあったときの観察の仕方は、森鷗外の「独逸日記」と共通するところがある。

晶子はやがてホームシックにかかり、残してきた子供たちへのおもいを短歌にこめ、外面の描写は詩に託してすぐれた作品をおさめている。パリを表面的にしかとらえられなかった寛と、感覚をはたらかせて血肉化させた晶子のちがいは歴然としており、この遊学は二人の明暗を決定的にしまったようである。

与謝野寛、晶子とは前後するが、小牧近江(一八九四―一九七八)は明治四十三年にパリに渡り、大正七年にパリ大学法学部を卒業して大正八年に帰国している。パリ大学在学中からロマン・ロランに

傾倒し、卒業のころはアンリ・バルビュスのクラルテ運動に参加した小牧近江は、大正十年二月、金子洋文、今野賢三らを語らって文化文芸誌「種蒔く人」を秋田県土崎港(現・秋田市)で印刷創刊した。

三 大正期のフランス熱

大正八年から一年間、及び昭和三年から四年間を東南アジア、パリで暮らしたことがある金子光晴(一八九五―一九七五)は晩年に書いた『ねむれ巴里』(中央公論社、昭和四八・一〇)の冒頭で、明治から大正にかけての、日本人のフランス観を次のように書いている。

僕の少年のころは、洋行といえは、同盟国の英京ロンドン、学術の都ベルリン、それからアメリカ諸方の都市で、フランスのバリエを志すものは少かったものだ。その頃は、まだ、日露戦争のほとぼりがほかほかしている時分で敵国ロシアの同盟国というので、子供ごろにも、フランスをばかにしていたほどで、人気のないフランスへ洋行するものは、腰ぬけか助平ときめこまれていた。フランスなどを志望するのは、軟文学者、特に破廉恥な、口にすべきでないようなことを恬然と筆にして、したり顔の所謂自然主義小説家などには、なるほどふさわしいことだと思われたものである。(中略)神田の青年会館だったか、錦輝館だったかで文芸講

演会があつて、たしか、若い坊主頭の小川未明氏だったとおもうが、そのことにふれて憤慨していたその口調をいまでも、僕は記憶している。大正時代になると、事情は少し變つてきた。美術家はもちろん、文芸家にとつても、パリはあくがれの聖地になった。

〔瘴癘^{しやうれいばん}蛮雨〕

金子光晴の証言を裏づけるように、萩原朔太郎は「愛憐詩篇」の中の「旅上」(大正二)で、「ふらんすへ行きたしと思へども／ふらんすはあまりに遠し／せめては新しき背広をきて／さまざまなる旅にいでてみん。／汽車が山道をゆくとき／みづいろの窓によりかかりて／われひとりうれしきことをおもはむ／五月の朝のしののめの／うら若草のもえいづる心まかせに」とうたっている。金子光晴の回想を読むと、永井荷風の影響が大きかったことがわかる。

大正期に入ると多くの芸術家がフランスに眼を向けはじめる。年代順に追ってみると、考古学者でのちの京大総長をつとめた浜田青陵(一八八一―一九三八)は大正元年から三ヶ年にわたってイギリス、フランス、イタリアに留学し、『南欧游记』(大正八)でフランス紀行を書いている。小山内薫(一八八一―一九二八)も大正元年十二月から二年八月まで演劇研究のためにフランスに学んだ。

島崎藤村は大正二年(一九一三)四月、神戸から汽船に乗るため、大勢の人に見送られて新橋駅を出発した。のちに『新生』で告白される姪との近親相姦の重圧から逃れる旅であり、「あだかも火宅を遁れ出ずるといふ可憐な求道者のごとく捨て得るかぎりのものを捨て

去りつつ、こつそりと故国に別れを告げて行くつもりだった。」(『海へ』第一章)という気持であつた。パリでは有島生馬に紹介されたポール・ロワイアルの下宿に落着いた。五年七月に帰国するまでの生活と感想は『平和の巴里』(大正四・一)、『戦争と巴里』(大正四・一二)、『海へ』(大正七・七)などとして発表された。

藤村の紀行文の特徴は、師でもある栗本錦雲の『晩窓追録』を再読して、「真実に他の好いものを受納れるやうな同情に富んだ天性を五十年前も前の日本の武士に見つけて」深い共感を寄せたりするところであり、全体に観察者に徹しようとしている。また、小山内薫、河上肇、沢木杢、山本鼎、小杉未醒などの日本人との交流、第一次世界大戦下のフランス国民の姿、戒厳令下のパリの描写はいきいきとしている。文学的にみると藤村のフランス体験は帰国後に書いた『エトランゼ』(大正一一・九)にパリでの孤独な生活が罪深い漂泊者の心情を通して表現されている。藤村のフランス体験は、のちに横光利一によって評価される。

藤村より少し早く、大正二年三月一日の船で出航したのは石川三四郎(一八七六―一九五六)である。日刊『平民新聞』の発行兼編集人として度々監獄に入れられ、『西洋社会運動史』(大正二・一)が発売禁止になったあと、ほとんど亡命のようなかたちで渡欧し、フランスを中心にして八年間のヨーロッパ生活を送った。フランスでは藤村と交友をもったことが『自叙伝・下』(昭和三二・九、理論社)に書かれている。石川三四郎がヨーロッパでポール・ルクリュやカーペンターと親交をもち、帰国後のアナーキズム運動に影響力

をもったことは、前出の小牧近江とともに、フランスが自由主義の国として世界中から注目されていたことをものごとくたるといえる。

生涯の大半をパリですごした画家の藤田嗣治が渡仏したのも大正二年である。『巴里の横顔』（昭和四・一二、実業之日本社）によると、第一次世界大戦（一九一四―一八）前のパリの日本人は大使館員を含めて三、四十人程度で、画家では梅原龍三郎、高村真夫、満谷国四郎、川島理一郎、小林万吾、安井曾太郎などが大戦前にいたということである。戦争がはじまるとともに、大使館だけでも八十人を含めて日本人は二千人、そのうち画家だけでも三百人に増大したと藤田嗣治は書いている。

吉江喬松（一八八〇―一九四〇）は早大教授として英文学を講じていたが大正五年から九年までフランスに留学し、帰国後は早大の仏文学科主任をつとめた。フランス滞在中の仕事はアナトール・フランス、メーテルリンクの作品を日本語に翻訳し、また坪内逍遙の『役の行者』『新曲浦島』の仏訳を試み、出版ののち上演されてもいる。大正九年九月の帰国前、平和会議が開催されたパリには多くの日本人が集まったが、その中の一人小牧近江とともにアンリ・バルビュスを訪れている。フランス滞在中に『文章世界』、『東京朝日新聞』、『人間』等に発表した文章を集めた『仏蘭西印象記』（大正一〇・九、精華書院）がある。

岸田国士（一八九〇―一九五四）は父の勘当までうけて軍隊をやめ、大正六年、二十八歳で東大仏文選科に入り、豊島与志雄、辰野隆、鈴木信太郎らと相識する。大正八年、まず仏領印度支那のハイフォ

ンに渡って働いたのちパリに向かった。パリでは主としてコーポ主宰のビュウ・コロンビエ座で演劇純粹化運動を実地に学び、大正十一年、父の死で帰国した。在仏の日本人とフランス女性の恋愛を扱った処女作『古い玩具』（『演劇新潮』大正一三・三）、「チロルの秋」（同、大正一三・九）などはそれまでの北欧、ドイツ、ロシアなどの暗い外国劇になれていた劇界に新風をもたらした。大正十三年十月創刊の『文芸時代』に同人として迎えられた背景にはフランス流の軽快さが共感を呼んだからであろう。横光利一の戯曲は、作としての出来ばえはともかくとして、岸田国士に影響されている。

東郷青児（一八九七―一九七八）は大正八年から昭和三年までパリに住み絵画を学んだが、折からの未来派運動、ダダイズム運動に刺激されて文学方面でも活躍した。大正十年八月七日の『読売新聞』に「日仏芸術家の会合」という記事が載り、そこに、画家のデュシャン、詩人のフィリップ・スーポー、トリスタン・ツァラなどとともに東郷青児と小松耕輔が写真で掲載されている。その二日後に東郷青児が『美術の都ダム』（『読売新聞』大正一〇・八・九）を発表している。そこでは、ダダイストの絵がパリジャンの人気を得ているという近況報告のあとに、「ダダイズムは唯に絵画の上のみではなく音楽の上にも舞踊の上にもある反映を作りつゝあります。そして彼等のイズムを徹底的に流布するため、極東宣伝委員まで最近きめられたといふことです。」と書いている。

ダダイズムは一九一六年（大正五）、スイスのチューリッヒから起こった前衛芸術運動であるが、ヨーロッパ各地やアメリカにまで波

及している。日本への紹介はフランス経由であり、その渦中にいた東郷青児の現地報告は日本の芸術界に大きな刺激を与えたのである。文献としてはその前年に若月保治が「紫蘭」の筆名で書いた「享楽主義の最新芸術——戦後に歓迎されつつあるダダイズム」(「万朝報」大正九・八・一五)、および「羊頭生」の署名による「ダダイズム一面観」(同)が最初である。

金子光晴は大正八年十二月、美術商鈴木幸次郎につれられて最初の外国旅行に出た。ロンドンからベルギーに行き、ブリッセル郊外のディーガムで親日家イヴァン・ルバージュの知遇をうけ、ヨーロッパ文化の目を開かれる。ヴェルハーレンに心酔して全集を原書で読破し、ボードレールの「悪の華」、レニエの「水の都」、モレアスの「章句」など、パルナシアン詩人の作品を耽読。詩作にも熱中した。パリで半年ほど過ごしてマルセーユから帰国の途につくが、詩作ノート二十冊のうち、二、三冊を除いて、ペルシア湾で海に捨てたという。大正十年一月神戸港に着き、残ったノートの一部を推敲して『こがね蟲』(大正一二・七、新潮社)を刊行した。この詩集の特徴は、青春のまっただ中にいて、現に生きている今を讀み享受した詩篇が多いことで、日本の風土をひきずっている痕跡がなく、無国籍の雰囲気がいっぱいである。その点では高村光太郎と対照的である。金子光晴が本当にヨーロッパの風土を発見するのは、大正十三年に結婚した森三千代と昭和五年から二年間パリに住んだ時である。

大正九年には二人の文学者が渡仏している。その一人は柳沢健(一

八八九〜一九五三)である。東大仏法科を卒業した柳沢健は、通信省、朝日新聞社を経て大正九年、欧州戦後の状況視察のため渡欧して欧州各地を巡ってその年に帰国した。その後外務事務官に任ぜられ、大正十三年一月、大使館三等書記官としてフランス大使館に二年間勤務した。在任中に訳詩『現代仏蘭西詩集』を出版し、日仏文化交流に尽力して大正十四年十二月、フランス国立劇場で「修禪寺物語」を上演させた。著書に『南欧遊記』(大正一二・六、新潮社)、『巴里を語る』(昭和四・一〇、中央公論社)、『回想の巴里』(昭和二二・一〇、酣燈社)があり、死後、柳沢健遺稿集『印度洋の黄昏』(昭和三五・四、非売品)が刊行されている。

もう一人は武林無想庵(一八八〇〜一九六二)である。東大英文科を中退し、ドーデの『サフォ』(大正二・三、新潮社)、アルツィーバーシェフの『サニン』上(大正三・一二、植竹書院)、下(大正五)などを翻訳した無想庵は、虚無的自我のおもむくままに奔放に生きる「私」と人妻との情事を描いた「ピルロニストのやうに」(『改造』大正九・三)を発表して小説家となり、同年、「やまと新聞」の元記者でフリーの寄稿者だった中平文子と恋愛結婚してフランスに赴いた。翌年、長女イヴォンヌが生まれ、大正十一年に帰国している。帰国後、『結婚礼讃』(大正一一・一〇初版、一一月十六版、改造社)、『文明病患者』(大正一二・七、同)などにパリ体験を書いている。『文明病患者』所収の「パリより」(『我等』大正九・七)は長谷川如是閑宛の書簡であるが、フランス文学の現状を報告する中で、「小生の勇ましく思つたのは、バルビュッスの態度です。彼もまた、ユー

ゴーヤ、ゾラや、ローマン・ローランと同じく、現在の一切を敵として、ユーマニテの為に戦つてゐる所が、目ざましく思はれます。政党に関係があるかないか、そんな処迄は知りませんが、クラルテといふ四頁の週刊雑誌によると、詰り世界の思想革命を企てゐる団体を組織しつゝある次第です。」と述べ、クラルテ運動に参加している作家たちの名を列挙している。小牧近江が影響を受けたクラルテ運動に無想庵も大きな関心を寄せていたことがわかると同時に、大正十一年に帰国してからの無想庵が、日本で盛んになりつつあったダイズム運動に接近していった理由もわかりかけてくる。

大正十二年十二月、無想庵と文子はイヴォンヌの教育をフランスで受けさせたいという目的で再び渡仏。しかし生活に行き詰り、文子は料理店を開いたりするが失敗し、北海道から来た農政学専攻の留学生と同棲する。無想庵は別れることもできず、コキューとしてその妻に養われる生活が続けて、小説「COCCUのなげき」(改造)大正一四・九)をはじめとしてパリ生活に取材した作品を書き続けた。昭和九年一月、靖国丸で政府送還によつて帰国するまでの作品は、『飢渴信』(昭和五・三、新時代社)、『流転の書』(昭和一一・四、岡倉書房)に収録されている。

四 木下杢太郎

大正十年以降は日本人の欧米留学がさかんになり多くの文学者が海外にでかけるようになった。円高により渡航費が安くなったのも

拍車をかけたようである。大正十年に渡仏したのは岡田三郎、木下杢太郎、児島喜久雄、小松清、辰野隆などである。

辰野隆(一八八八—一九四六)は大正五年に東大仏文科を卒業、大正十年東大助教授に任命されると同時にフランス留学を命じられて二年間フランスで学んだ。帰国後は東大で最初のフランス文学の講座担当者となり、同僚の鈴木信太郎とともに日本におけるフランス文学の本格的な研究と紹介につとめた。文学、芸術の各領域におけるすぐれた鑑賞家としても知られ、門下から渡辺一夫、伊吹武彦、小林秀雄、三好達治、中島健蔵、中村光夫、森有正など、それぞれ特色のある学者、詩人、評論家などが輩出した。フランス留学時代の回想は『青春回顧』(昭和二二・四、酣燈社)、『燈前茶後』(昭二四・一、日本出版協同株式会社)などに収録されている。

岡田三郎(一八九〇—一九五四)は大正十年秋から十二年六月までフランスに遊学し、コントの形式を日本に紹介した功績がある。小説『巴里』(大正二三・三、新潮社、昭和一五・一二、明石書房)は滞仏中に知った人妻との恋愛を私小説風に書いた作品である。

小松清(一九〇〇—一九六二)は大正十年に渡仏しアンドレ・マルローの知遇を得た。昭和六年に帰国して後マルロー、ジイドを中心にフランス文学の新動向を紹介して日本のフランス文学愛好者に刺激を与えた。マルローとの出会いから身につけた行動的ヒューマニズムを基盤として、船橋聖一とともに行動主義文学論を提唱して昭和十年前後の文壇をにぎわした。昭和十二年に再び渡仏し、パリで『日仏文化』の編集にたずさわっていたが昭和十五年六月、パリ

陥落の前日に引揚げ船の最後といわれる榛名丸で帰国している。『沈黙の戦士―戦時下のバリ日記』（昭和一五・一一、改造社）は記録文学としての価値が高い。

木下杢太郎（一八八五―一九四五）は大正十年五月、横浜出帆の「諏訪丸」でアメリカに赴き、イギリスを経て同年十月、パリに着いて医学研究に従事するかたわら、美術、南蛮・吉利支丹研究にも情熱を燃やした。大正十二年には阿部次郎、児島喜久雄、前田青邨らとイタリア、エジプトに旅行し、スペイン、ポルトガルで南蛮文献を渉猟したりして大正十三年八月に帰朝した。

木下杢太郎の西洋体験については、杉山二郎著『木下杢太郎―ユマニテの系譜』（平凡社、昭和四九・一）、新田義之著『木下杢太郎』（小沢書店、昭和五七・七）などが論じているのだが、明治以来の洋行者の中では、森鷗外のドイツ、夏目漱石のイギリスについて、木下杢太郎のフランス体験は重要な意義をもつと思われる。パリに住んで三ヶ月目に書いた「大寺の前の広場」（大正一一・一・二六執筆、「サンデー毎日」大正一一・六・一一、一八）に次のような文章がある。

昨日からわたくしは、自分の科学的専門研究を始めた。言葉の爲めと、一般文化の感得の爲めとに専ら費した三箇月の間は、巴里は実に甘美であつたが、為事場の裡に入ると、科学の一般性が天竺鼠の臭気と共にわたくしの心に滲透して、仏国及び巴里の特殊感情はずつと遠のいてしまった。そしてわたくしの選んだ学問

は絆んだ絹糸のやうにややこしいもので、それに筋道をつけるだけでもたやすく人の一生が過ぐべきものである。

独逸にも仏蘭西にも、その正当な系統学がまだ出来てゐなかつた。

夜、旅舎に帰り、そしてわたくしは長嘆した。神は何と思つて、わたくしにこんな、同時にいろいろなものを愛する心を賦与してくれたことかと。（春寒寂しき雑草の廃園――）

たとへば、好きなギユスタブ・モロオを研究するだけでも一、二年はかかる。フランシスコ・シャビエルの伝記になれば四、五年はたやすく過ぎる。道は繁く、命は短い。

わたくしは毎日実に過勞する。巴里はいろんな文明の果実が集ちしてゐるから、実に出のある都会である。人の言ふが如く巴里は快活で面白い処かも知れない。わたくし自身に取つては実に重く悩ましき世界である。何の隙があつてか快活なる諸君と共に大通りの茶肆に憩はうや。

それでも夕方は一盞のシャトオを傾くるを常とする。そして今日も食後つい案の前に腰かけたままとろりとした。

（全集第十一卷、原文旧漢字）

専門の自然科学の分野では日本人として学ぶものは期待できないとしながらも、文化の面では西洋の奥深さに魅せられているさまが書かれている。パリを「実に重く悩ましき世界」と表現するところがその気持が集約されている。そして杢太郎はパリ滞在半年を経た

ころ、ヨーロッパの本質について次のように書く。

小生仏国に來り、如何にその人々の個人の自由、個性の尊重、学問芸術の愛、殊に真理及び人間味の倫理（孰れも希臘系の伝統のものにて、東洋風とは異なる）に對する熱望あるかを見、驚嘆仕り候。そして小生も一個自由なる市民として一個の純然たる学問に従事するの決心を致し候。多数の日本人が、日本から或は独乙より來りて巴里を過ぎ候。役人は役人、医学者は医学者として彼等はいかにも一般的の高い教養なく、單に技師の技術を有するに過ぎずして、而していかに傲慢なるかを知り候。殊に為替關係安き独乙にていばり生活し、その狭小の見識から威丈高になりて日本に歸りゆく人々の姿は、正に之れ猿猴にして冠すとはこの謂ならむかと存じ小生丈はこの轍は踏まざるまじく決心居り候（大正十一年三月二十四日、太田賢治郎宛）

長兄にあてたこの手紙には、西欧の精神を深いところで理解している太太郎の面目があらわれている。それと、日本からの留学生に對するきびしい觀察は、『ふらんす物語』の中の「雲」で書いたと同じように、表面的なところで西欧を理解したつもりになって帰国し、洋行帰りを誇らしげにふりまく同胞、それを許容する日本人への批判になっている。

児島喜久雄（一八八七—一九五〇）はパリで木下太太郎と親交を深めた。「太田正雄君と私」（木下太太郎全集、第七卷付録）には「太

田君が來てからは殆んど毎日行動をともして居た。天氣のいゝ日は美術館へ行つたり、展覽会を見たり、画商を廻つたりしてレストランやカフェーで思ひのまゝに芸術を談じた。音楽会やオペラや劇場へも頻りに通つた。一緒にテオドル・デュレー氏を訪問したのも其頃だつた。」と書いている。太田正雄は木下太太郎の本名である。のちに東大で美術史を講ずることになる児島喜久雄との出会い、両者にとつても有益だつた。

大正十一年に渡仏したのは大杉栄、獅子文六、森茉莉、松尾邦之助などである。大杉栄のフランス体験は『日本脱出記』（大正一一・一〇、アルス）に、獅子文六のそれは『脚のある巴里風景』（昭和六・七、白水社）に書かれている。森茉莉は『贅沢貧乏』（昭和三八・五、新潮社）、『記憶の絵』（昭和四三・一一、筑摩書房）などで奔放でユニークなパリ体験を書いている。

五 松尾邦之助の役割

大正期から昭和初年にかけて渡仏した文学者は多いが、その中で松尾邦之助（一八九九—一九七五）のはたした役割は大きかった。

松尾邦之助は東京外語仏語科を卒業して大正十一年に渡仏しパリ大学に學んで卒業したあと昭和三年までパリに滞在した。翌年再渡仏し、昭和二十一年三月まで、通年で二十一年間のヨーロッパ滞在である。この間、ベルリンに二年、トルコに一年、スペインに二年滞在したこともあり、日本における国際人の先駆者であつた。主な仕

事は「巴里」(昭和四・五、新時代社)、『フランス放浪記』(昭和二・四、鱒書房)、『デイド会見記』(昭和二・八、岡倉書房)、『とるこ物語』(昭和二・一一、竹内書房)などであることができる。『巴里』の内容は「巴里の姿」「種々相」「女権論」「巴里夜曲」「文学」「劇・映画・ルヴュ」「東西西洋文明論」などからなり、渡仏以来のバリ印象記である。描写は客観的でバリという都市のもつさまざまな顔を紹介している。松尾邦之助が力点をおいているのは日仏文化交流であり、「修禪寺物語」上演の経過やフランス人の印象をまとめたり、パリで上映された日本映画「萩寺物語」への反響も書かれている。また、パリに居住している文学者の紹介やフランスの日本研究者を紹介する中で「ハイカイ詩人」と呼ばれるオリエンタリストに注目している。昭和二年には「日仏評論」という仏文雑誌の編輯をてがけて日本文学を紹介する仕事もしている。

「フランス人の反アジア論」という文章では、日清、日露戦争以来、黄色いアジアの血への恐怖があらわれている反面、日本はただ西欧を模倣しているにすぎないとする感情的な嫌悪感が主流であることを紹介したあと、松尾邦之助自身の見解として次のように書いている。

今日の若い日本が、西欧を理解しやうと非常な努力をしてゐるのに、西欧は日本及びアジアに冷淡極まるものである。……これは生活形式に基いた或必然的な要求の故でもあらうが、一方日本にある美しいものの文学哲学でも美術でもが、日本人自らにあま

り等閑視されてゐる故である。唯物的実証界に傲語する科学文明の西欧人の前に黙々としてゐる時ではない。アメリカ人であり日本人である前に、吾々は同じく人間である。……あまり度々黄色人、黄色文明、と黄色臭く書き立てられる偏見のな筆の前には、一種の不快が伴ふ。(中略)西欧が有限の裡に万象の実証的關係を探つてゐる間に、アジアは無限の境に瞑想した……西欧人はアジアの得なかつたものをにぎり得たと同時に、西欧人の触れ得なかつた深い洒脱味のある静かな哲学をアジア人は得た。東西西洋の遠さがこゝにあり、近づかなくてはならぬ理由が同時にこゝにある。

東西文明の超えがたい溝を自覚しながらも西欧崇拜に墮することなく、相互理解のための道を模索しようとしている松尾邦之助の位置が示されている文章だ。決して排他的ではなく、岡倉天心に通ずるような良質のアジア主義が示されていると思う。巻末の「巴里から東京まで一久しぶりで見た日本」は七年ぶりでみた日本の印象を書いたものである。折しも日本は「モボ・モガ時代」といわれた時期で、その変貌ぶりにおどろきながらも、「この世界化の趨勢は、必然なのだ。おもむくべくしておもむくのだ。そしてその世界化の底に新しい意味の特殊な伝統が蘇るのだ。(改行)雑然たれ、紛然たれ、そこに現代日本の象徴があり進路があるのだ。我々は、今日東京に見る勇敢な伝統破壊をも、少しも驚くことはないのだ。東京は世界の歩む方向に、素直に、但しちつとあわただしすぎてはゐるが、歩

いてゐるだけだ。しかし急テンポは現代人の合言葉だ、私共は東京の異常なる前進力を、むしろ讚美すべきなのだらう。」と書いている。この文章に見られる柔軟な精神は、明治期の永井荷風や高村光太郎ともことなる。パリでダダイズムを中心とする前衛芸術運動を肌で感じとってきただけのことはあると思わせるしなやかに注目したい。

戦後に書いた『フランス放浪記』の内容は『巴里』と重複する部分もあるが、フランスに紹介された日本文学のリストや、俳諧がフランス文学に及ぼした具体的な影響として、ダダイズム運動の中心であるトリスタン・ツァラを紹介しているところは興味深い。松尾邦之助がフランスで紹介する時に力を入れたのは岡倉天心であったことや、一九三五年に川路柳虹の協力で『日本文学史』をパリで出版したことも書かれている。一九三九年にはパリのメルキユール・ド・フランス社から仏訳『現代日本詩人選集』を刊行し、土井晩翠から丸山薫に至る三十一人の詩人、子規以下十一人の歌人と、八人の俳人の作品を収めている。(注2)。

金子光晴は『ねむれ巴里』の中で、二度目に渡仏して生活費に困っているとき、松尾邦之助がパリ在住日本人の名簿をつくる仕事をしていた手伝ってくれる人を求めていると聞いてでかける話がでてくる。名簿は三百人を超えていたという。そして金子光晴は、「松尾氏は、詩人の先輩の川路柳虹とも親交があり、共訳で日本詩集のフランス語版を出したり、岡本綺堂の戯曲の仏訳を出したりした。十人か二十人、当時のフランス文壇の大家のもとに一冊ずつ署名した本

をとどける役を依頼された。面倒な所番地をさがして、僕は本をとどけた。」と松尾邦之助のことを書いている。この時期に松尾邦之助がパリで世話したのは武林無想庵、辻潤などであるが、このほかに川路柳虹ともフランスで出会って私淑することになる。これらの作家・詩人は大正末期に、ダダイズムを日本に紹介し運動を推進したりした人であることも、日本文学とフランス文学との関係を考えるうえで重要である。

大正期に渡仏した文学者はこのほかに、大正十三年から一年半バりに住んだ西条八十がある。『巴里小曲集』(大正一五・四、交蘭社)に収められた詩篇の大部分はパリで作られた。その中の「お菓子の好きな巴里娘／ふたり揃へばいそ／と／角の菓子屋へ」(今日^{ボジュール}は。』)ではじまる「菓子と娘」は歌になって昭和時代に青年たちに愛唱され、日本人のパリへの憧憬を一般化させたものである。

深尾須磨子(一八八八―一九七四)は大正九年に夫を病気で失ってから詩作の道に入り、与謝野晶子に師事した。大正十四年から昭和三年までの欧州生活で作った作品を『牝鶏の視野』(昭和五・五、改造社)にまとめた。滞仏中に学んだ新即物主義、短詩運動の実験的な詩は日本現代詩に刺激を与えた。コレットと親しくなって、そのすすめでコントにも筆をそめたりした。その後も、昭和五年から三年間、昭和十四年から三年間と渡仏している。

芹沢光治良(一八九七―)が渡仏したのは大正十四年から昭和四年までである。東大経済学部卒の芹沢はソルボンヌで貨幣論を学ぶ一方、ポール・リュクル、ケッセル、ジュール・ロマンらと親交を

もって、帰国後「ブルジョア」(改造)昭和五・四)が懸賞小説一等に当選し作家生活に入った。パリ取材作に『巴里に死す』(婦人公論)昭和一七・一―一二。昭和一八・三、中央公論社刊)、『巴里の懺悔』(昭和二四・四、井原文庫)があり、パリに関するエッセイは『文芸手帖』(昭和一八・四、同文社)に収録されている。

中野秀人(一八九八―一九六六)は政治家中野正剛の弟で、大正九年九月、「文章世界」の懸賞当選論文「第四階級の文学」によって登場し、詩誌「ダムダム」同人となり劇団「戸をたたく座」を創立したりしたあと大正十五年に渡欧し、パリでフランス女性と結婚して昭和六年に帰国した。パリ時代の中野秀人については、金子光晴が『ねむれ巴里』の中で、パリで絵の修行をしていたことや、第一次大戦の講和談判の記事を日本の新聞社に送って大金をつかんだという噂なので借金を申しこもうとしたが逃げられてしまったエピソードを書いている。

大正期に渡仏した人たちがそこで得た成果を発表するのは昭和に入ってからである。そして昭和期にもフランス熱はさかんであった。

六 辻潤その他

昭和二年四月、土岐善磨(一八八五―一九八〇)は朝日新聞社特派員としてジュネーブの世界海軍軍縮会議に出張し、欧米各地をめぐったあとダンチヒでのエスペランティスト第十九回万国大会にも出席して十二月に帰国した。『外遊心境』(昭和四・四、改造社)には

パリに立ち寄ったときの感想文が載っている。この本には巻末に紀行文の中から六篇をえらび、松本清彦の訳で「エスペラント訳文六題」が併載されている。

昭和三年には多くの文学者が渡仏している。竹中郁(一九〇四―一九八二)は小磯良平と渡欧し、パリを中心に二年間滞在してジャン・コクトーとも会い、新芸術をさかんに吸収し、マン・レイの「ひと」をみて、シネ・ポエムを書いた。帰国後刊行した『一匙の雲』(昭和七・七、ボン書店)、『象牙海岸』(昭和七・一二、第一書房)などの詩集で示された感性と知性との均衡美は、若い世代に影響を与えた。

竹内勝太郎(一八九四―一九三五)は昭和三年から翌年にかけて渡欧、フランスの詩、小説、劇、絵画、音楽、舞踊について学び、河盛好蔵からポール・ヴァレリー、アランなどの存在を知らされ、ヴァレリーをフランス最大の詩人と目するようになった。ヴァレリーからマラルメの象徴主義に関心を移して詩作を展開した。河盛好蔵(一九〇二―)は大正十五年に京大仏文科を卒業後、関西大予科講師となったが、昭和三年辞職して渡仏し、パリ、グルノーブルに留学、五年帰国した。『ふらんす手帖』(昭和一八、生活社)、『パリ物語』(昭和三四、七、角川書店)などは軽妙なユーモアを駆使した紀行文である。川路柳虹(一八八八―一九五九)も昭和三年から翌年にかけて外遊し、パリに滞在した。

辻潤(一八八四―一九四四)は昭和三年一月、読売新聞社の第一回パリ文芸特置員として、長男一(まこと)をつれて神戸港から榛

名丸で出航した。パリ滞在中は「巴里通信」を読売新聞に連載した。パリでは先に渡仏していた武林無想庵、松尾邦之助、村松正俊、画家の林俊衛らに逢い、翌年一月、長男、村松正俊の三人で、シペリヤ経由で帰国した。

四十五歳の辻潤が十五歳の長男をつれての洋行は、仲間たちから多大な関心を持たれたようで、同人誌「悪い仲間」昭和三年二月号は「辻潤渡仏送別記念号」を組んだ。辻潤のパリ印象記は『絶望の書』（昭和五・一一、万里閣）に「巴里の下駄」としてまとめられている。パリに着いても名所見物に気がおらず、ブドー酒をのみながら「大菩薩峠」に読み耽っているあたりはいかにも辻潤らしい。しかし、全体を通して読むと特に奇をてらうわけでもなく、むしろ正当な意見が随所にみられる。

僕は自分が西洋へ来て一番沁々と感じることは、自分達が昔立派に持つてゐた文化を途中から西洋文明の侵害によつて殆ど失つてしまつたと云ふことだ。今となつては到底とり戻すことの出来ない我々の固有の文化のことだ。そればかりではなく、現代のわれわれの不幸の原因はたいてい西洋文明の輸入に起因してゐると云つても過言ではないと思ふ。最初西洋の文明に仰天して眼の眩んだ人間を僕は今更咎め立てしやうとは思はないが、そのために自分達の持つてゐた優れた物を悉く失つてしまふに至つては沙汰の限りである。異人と交際して、異人の文明を輸入したことはわれわれにとつてどうしても物の間違ひだつたと云はなければなら

ない。

僕はなにも高い旅費を払つてわざ／＼西洋のアラ探しに來たわけではないばかりか、多年憧憬がれてゐた巴里へやつて來ることが出來たのだから有頂点になつて喜んでゐてしかるべき筈なのだが、さううまく行かないところが世の中と云ふ奴だ。（『日本がよいよ』）

伝統文化をとどめるパリを見て日本の近代が失つたものの大きさを自覚するあたりは、明治の永井荷風に共通する「反文明開化」の立場である。浅草に生まれて江戸の情緒を知っている者の述懐である。日本の「近代化」を批判する姿勢は漱石の「現代日本の開化」とも共通している。さらに見てゆくと、帰国後に書いた文章には、西洋に対して日本人としてめざめるような心境が示されている。

自分が西洋へ出かけた最大収穫は自分が日本人であると思ふハツキリした自覚と、自分の生れた郷土が如何に美しいかといふことを今更ながら覚り得たことである。勿論、それは人によるので、僕の場合だけの話だが、他の人達が西洋へ出かけて、如何に西洋に感嘆し、心酔してかへらうとも、僕だけは断じて西洋には頭を下げないつもりだ。考へてみると、自分がこれまでひそかに敬意を払つて來た西洋の偉人達はみな西洋の科学的精神に反抗してゐる人達ばかりだ。

西洋流の尺度から押せば、われ／＼はまだ半開人かも知れぬが、

僕等の尺度でかれ等を見れば、かれ等こそほど野蛮である。僕なんにしる異人に感服することは出来ない。恐らくこれは僕の年齢の問題であるかも知れないが、僕にモダンボーイになれと云つたところで、それは無理な註文である。

日本が西洋の文明をとり入れて、それをドシ／＼利用することはまことに結構なことかも知れないが、西洋をありがたがつて、われ／＼固有のすぐれた文物を忘却するに至つては言語道断である。

（「西洋から帰へつて」）

ここに書かれている意見は、昭和十年代にさかんになる、いわゆる「日本回帰」の論調とよく似ている。というより、それらの先駆をなしているといえよう。だが、この意見を述べたころの日本は、西欧崇拜のモダニズムが全盛であつた時期であることを考慮すると、辻潤の獨創性が見えてくるのである。注意して読むと、右の主張は、のちに横光利一が「旅愁」（昭和一二〜二二）の中で、矢代耕一郎という人物を通して語る意見に近いことがわかる。

私見によれば、明治以来の洋行文学者の中で、西欧に対して何ら劣等感をもたずに日本人としての自覚を表明したのは辻潤が最初である。同じ「西洋から帰へつて」の中で辻潤は、外国に住んでみて日本文学を見渡したとき、岩野泡鳴が日本近代の最大思想家であることを発見したと述べ、他に幸田露伴と泉鏡花の名を挙げ、「日本の現在の文壇？」に露伴と鏡花が存在してゐることは実に日本文学のために慶賀すべき事である。世界を見渡しても、かれ等に此敵する

文学者はひとりもゐないと云つても過言ではない。」と述べていることも、辻潤の文学観のたしかさをうかがわせる。

昭和三年九月、金子光晴と森三千代（一九〇一〜一九七七）の夫婦は東南アジア、欧州放浪の旅に出た。上海、シンガポール、ジャワで半年をすごし、三千代が先にパリに向かい、光晴は単身で東南アジアを放浪したあと、昭和五年一月にパリに着いた。パリでの二人の生活は戦後になって金子光晴が『どくろ杯』（昭和四六・五、中央公論社）、『ねむれ巴里』（昭和四八・一〇、同）で書いており、森三千代は第一小説集『巴里の宿』（昭和一五・三、砂子屋書房）、旅行記『をんな旅』（昭和一六・四、富士出版社）などでパリ体験を描いている。自力で生活費をかせぐ二人の生活ぶりは、官費や援助によつて洋行した者たちとちがう切実感があり、ひもつきでない気楽さからくるボヘミアンのバリ体験として貴重である。昭和三年の秋には久米正雄（一八九一〜一九五二）夫妻が渡欧して文壇の話題となつた。芥川の自殺に続く葛西善蔵の死で、大正期の作家が創作上の難問に直面したあげくの逃避旅行ということで話題になり、同人誌「悪い仲間」を改題した「文芸ビルディング」は昭和四年三、四月号で「久米正雄は何故妻を連れて洋行したか？」という懸賞欄を設けて一般人からの投稿を載せたりした。正宗白鳥（一八七九〜一九六二）も昭和三年十一月から一年間、欧米巡遊の旅をしており、フランスに立ち寄っている。

昭和四年には井汲清治（一八九二〜）、中込純次（一九〇四〜）、伊吹武彦（一九〇一〜一九八二）などのフランス文学者のほか岡本

かの子（一八八九〜一九三九）、久生十蘭（一九〇二〜一九五七）が渡仏している。岡本かの子は夫の一平、息子の太郎、新田亀三、恒松安夫の一行五人で盛大な見送りを受けて出発し、昭和七年までパリに滞在して欧州各地を訪ね、帰国後、『見在西洋』（昭和九・九、不二屋書房）、『世界に摘む花』（昭和一一・三、実業之日本社）、「巴里祭」（『文学界』昭和一三・七）などで西洋体験を書いている。岡本太郎はかの子が帰国したあともパリに残り昭和十四年、ソルボンヌ大学民族学科を卒業して翌年帰国した。岡本太郎に『母の手紙』（昭和一六・一二、婦女界社）がある。久生十蘭は岸田国士に師事して演劇に熱中し、パリでは物理学校、技芸学校に学び、シャルル・デュランについて演劇を研究した。昭和八年に帰国して新築地劇団演出助手となり、『新青年』その他に探偵小説を発表した。

昭和六年には角田房子、渡辺一夫、平林初之輔、林芙美子が、七年には生島遼一、八年にきだ・みのる、朝吹三吉、朝吹登水子などが渡仏している。渡辺一夫は『筆記帖』（昭和一一・一〇、白水社）で洒脱なパリ留学体験を書いている。平林初之輔は二月に、文学および映画研究のため、日本文芸家協会代表としてパリの国際文芸家協会大会出席をかね、早大留学生として渡仏したが、その年の六月、出血性脾臓炎のため、三十八歳で客死した。林芙美子は六年十一月、シベリア経由で渡欧し、おもにパリに滞在して七年六月に帰国した。『文学的自叙伝』（『新潮』昭和一〇・八）で林芙美子は西欧体験をふりかえって次のように書いている。

日本へ上陸するなり考へたことはすばらしい詩を書きたいと思つたことです。血の気のない古色をおびた小説が私の眼にうつり始め、私は日本の若い作家に軽い失望を感じたりしたのです。一年あまりの欧州滞在中、私は感覚ばかりが逞しくなつたやうです。感覚ばかりが逞しい故に、自分の作品の上の技巧はかへつて稚拙なもので、一年の間は、散文のやうな小説を書いてゐました。（中略）曲りなりにも血の気の多い作品を書きたいと思つてゐたのです。日本のいまの文学から消えてゐるものは詩脈ではないかと思つたりしました。詩のない世界に何の文学ぞやと思つたりしました。ちつじよ、立つた大論文も書けないので、いまさら詩を論じることが笑はれさうだけれども、私は欧州で感じた日本の言葉の美しいのに愕き、その言葉で歌つた日本の詩に金鉞を掘りあてたやうなほこりを持つたのです。

このことばを裏づけるように第二詩集『面影』（昭和八・八、文学クォーター社）を刊行した林芙美子は小説の方にも自信をつけて活潑な執筆活動を展開しはじめた。欧州体験の成果が顕著にあらわされた例として、林芙美子は特異である。「感覚ばかり逞しくなつた」というのは身体で西欧を体験したということである。与謝野晶子をはじめとして欧州を体験した女性文学者は感覚を鋭敏にはたらかせて西欧を感得しているところに共通点があり、知識が先行して観念的に西洋を理解してくる多くの男性文学者とはちがっているということを感じがされる。

七 横光 利一

昭和十一年（一九三六）二月十日、三十九歳の横光利一は「東京日日新聞」「大阪毎日新聞」特派員として「箱根丸」で欧州に向かった。渡欧直前の座談会「横光利一渡欧歓送会」（「文学界」昭和一一・四）には、阿部知二、河上徹太郎、川端康成、小林秀雄、島木健作、武田麟太郎、林房雄、深田久弥、舟橋聖一、村山知義らが出席し、日本作家の代表として、横光がヨーロッパをどうみるべきかについてめいめいが進言している。この中で洋行体験者は村山知義だけであるが、各自のヨーロッパへの思いが語られているところがおもしろい。

提言は大きくふたつに分けられる。ひとつは武田、舟橋に代表される意見で、日本の若い良心的な作家の代表として横光に期待をかけ、「やっぱりみんなに利益を与へてもらひたいんだ。さういふ意味で横光は行つていろんな思想とか宗教とかいふものを思想的に見てきてもらひたいと思ふな」（舟橋）、「行くからには、フランスの社会情勢、政治情勢に關聯して、文学の位置なり、文学はどうなつて居るか、やはりそこは日本の我々の問題と結びつけて見てほしい、我々の代表者として行つて来て貰いたいね」（武田）というような発言がなされている。

これと対照的なのは小林秀雄で、「要するに外国へ行つて一番得てくるのは感覚のひろがりだらうね。思想的なものを得るのは本でた

くさんだからね。それを生で見たり聞いたりしてくるといふことね。まう一つは（略）日本の今の文化の歪み、つまり特殊性、さういふものを僕等は日本に生活していると実にわからない、頭ではわかつた気がしてゐるが。さういふものを、僕はバリへ行つただけで、思ひ掛けない直観を得ると思ふんだ。」というように、感覚のひろがり直観力を強調している。さらに小林秀雄は、「僕はさつきいったやうに、洋行するのに文学なんか捨ててね。ほんとに僕は見物したいよ。眼と耳の訓練をしてきたいよ。それから得てきた感覚でもつて、また帰つてきて文学が見られるのが楽しみなんだよ。文学を見に向ふへ行く馬鹿はないさ。またそんなこと望んだつてそんなひまはないよ。とにかく向ふへ行くといふことは生活しに行くんぢやないんだからね。見物しに行くんだからね。文学は生活しなきゃわからないよ。ただ普通の意味でもつて見聞をひろめ、それだけでも十分だと思ふんだ。僕なんか横光さんに望むのはそこだけだな。十分そいつをやつて何も考へないで遊んでくることね。僕はもう何も望まないし、望んだつてそんなものは愚劣だと思ふしね。」というように発言している。

小林秀雄の発言には明治以来の洋行者の文章に対する総括の意味も含まれていて興味深い。横光利一はどの提言に従ったかといへば、『欧州紀行』（昭和一二・八、創元社）でみるかぎりには小林秀雄の提言に添って行動していることがわかる。そして武田麟太郎や舟橋聖一の提言に対しては小説「厨房日記」（「改造」昭和一二・一）や「旅愁」で、自己の思想を展開している。

四月四日

雨。巴里へ着いてから今日で一週間もたつ。見るべき所は皆見てしまった。しかし、私はこの事は書く気が起こらぬ。早く帰らうと思ふ。こんな所は人間の住む所ぢやない。中には長くゐることを競走するものもあるが、愚かなことだ。

巴里について、いろいろの人が、いろんな事を云つたり書いた。しかし、それらの人々が、自分の顔がどんなに変つたか誰も云ひもしなければ、知りもしない。

四月六日

晴。巴里へ来てから初めての晴天だ。しかし、私の頭の中では、渦が幾つも巻きつづけ、衝突し、崩れ、巻き込み合ひ、不斷に変化をつづけて行く。私がひとり部屋に帰り、夜更けて思ひ浮ぶ風景は、通つて来たアラビアの沙漠である。

右の引用文で注目されるのは、「早く帰らうと思ふ」という表現で、これは身体が危険を予感して拒絶反応したことを意味する。得体の知れぬ魔力に魅きつけられそうな気配と言つてもよい。続く文章で「自分の顔がどんなに変つたか」と記述しているところを見ると、身体の変化から自分の感覚の変化に気づいたようだ。二日後の日記では、頭の中についた混乱について記述しているが、いずれにしても身体の変化を記しているところに特徴がある。とにかく身体の変化を比喻に用いた文章が目につく。

四月七日

巴里の憂鬱といふ言葉がある。私もこの年まで、度々憂鬱は経験したが、こんな憂鬱な思ひに迫られたことは、まだなかった。身が粉な粉なに砕けたやうに思はれ、ふと取りすがつたものを見ると、いずれも壊れた碎片だ。殊に雨にでも降り籠められれば、建物の黒さが身の除けやうもなく心に滲み渡つて来る。立ち騒ぐ人もなく雨の中で悠悠と傘もささずに立話をしてゐる人人の風景は、のどこどころではない。

いら立たしい感情はどこへかき消え、うんとも声の出ない憂鬱さが腰かけてゐる椅子の下から這ひ上つて来る。何ともかとも身の持ち扱ひに困るのだ。

ここでも、「身が粉な粉なに砕けたやう」とか「うんとも声の出ない憂鬱さ」というような身体的比喻で自分の気分を説明しようとしている。やがて、パリ滞在一ヶ月になったころの「五月二日」には、「たしかに少し神経衰弱の気味がある。しかし、ニイチエの云ふ如く正当だから神経衰弱になつたのだと思ふ方があるいは正確かもしれぬ。」と自覚症状を記すまでになる。このあと、五月四日から九日まで横光はロンドンに旅行するのだが、ロンドンの印象はよくなかったと見えてあまり書いていない。その原因のひとつは、「五月五日」の項に、「ペンクラブの招待日だが、招待の最中に、出席者の一員が南條氏に、これを英国のペンクラブだと思つてくれては困ると打ち

あけたさうだ。会の計画者がひどく不自然なことをしてゐたのだ。」と書いてあることと関係がある。渡航前の座談会で、ロンドンのベシクラブで講演を依頼されたので羽織と袴を用意して行くと述べていたことと考え合わせると、当日予定が変更され、講演者は同じ船で渡仏した高浜虚子に変更になったというのが真相らしい。虚子の『渡仏日記』（昭和一一・八、改造社）には当日の様子がくわしく書かれている。この日の出来ごととは横光利一に、日本を代表する文学が俳句であることを認識させ、帰国後は俳句に力を入れはじめる。ロンドンを去る日の日記。

五月九日

どこ一つ見る気も起らずロンドンを発つ。十二時半。ドーバーの上は霧ばかりだ。霧は茫茫と際限なく続いた雪原と同じだ。太陽の輝いた青空と雪原の間を、琲珈を飲みつつ飛ぶ。フランスの下界は整然とした方形の群団だが、イギリスの下界は雲形だ。三時にパリに着く。何と気楽な都会だらう。初めて家に帰つたやうな気持ちになる。私のロンドン行は、パリを見直すために行つたやうなものだ。

ロンドン旅行を経験したあとのパリ印象記からは、はじめにあつたような身体感覚による観察はなくなり、客観的に近代都市としてのパリを描写するようになる。マチスの絵を何度も見たり、岡本太郎とつれだって街の中を見物した文章が続いている。

横光利一の『欧州紀行』はパリで書いた日記と妻にあてた書簡からなっているが、その記述は主観的であり感覚表現が特徴である。吉田健一が「先駆者横光利一」（『文芸』臨時増刊『横光利一読本』昭和三〇・五）で『欧州紀行』にふれて、荷風や藤村と比較しつつ、「横光利一はヨーロッパに現れた日本の最初の近代人だった。彼は藤村と同様に外国語を殆ど知らなかったが、その知識の不足を彼の意識で補った。彼は外国に旅行した興奮を抑えるので緊張した意識にパリの現実を映し、それと日本の現実の差までを意識するという仕事をしたのであって、このことが彼の外遊を一つの歴史的な事件にしている。」と書いている。これを具体的にすれば身体表現を駆使した印象記の独自性がみえてくる。『欧州紀行』は発表当時評判がわるかったのは感覚的すぎるからであつたが、その後「旅愁」を書く際にも身体表現が巧みに使われており、横光利一とパリの出会いが衝撃的であつたことをものごたる。実際、多くの洋行者の中で横光利一ほど衝撃を受け、思想の変換にまで至つた文学者は稀有であることに注目しておきたいと思う。

横光利一が渡仏した同年、武者小路実篤も当時ドイツ大使であつた兄公共のすすめでヨーロッパを巡遊しフランスにも寄っている。

『湖畔の画商』（昭和一五・六、甲鳥書林）、『欧米旅行記』（昭和一六・三、河出書房）が刊行されている。武者小路公共の『滞欧八千一夜』（昭和二四・一一、晩書房）もでている。

昭和十二年には今日出海（一九〇三—一九八四）と桑原武夫（一九〇四—）がでかけている。今日出海は小説集『大いなる薔薇』（昭和

和一五・六、白水社）と評論集『東西雜記』（昭和一六・七、三学書房）でフランス体験を描いている。桑原武夫には『フランス印象記』（昭和一六・六初版、昭和二二・一二再版、弘文堂書房）がある。昭和十三年に渡仏した中村光夫（一九一一〜）は戦争のため一年あまりでフランス滞在を中断されたが、パリで小林秀雄に宛てた手紙を集めて『仏蘭西紀行集・戦争まで』（昭和一七・七、実業之日本社）を刊行した。

結 び

渡仏した文学者、思想家の数が多いため概観に終始してしまったが、日本文学とフランスのかかわりの深さを漠然とながら了解できたとと思う。問題は、個々の文学者が、洋行することによって何を、自分の作品でどのように展開したかを説明することにある。その典型は横光利一ということになり、「厨房日記」「旅愁」の作品分析が必要になってくる。すでに拙論「横光利一の転換―『厨房日記』試論」（北大「国語国文研究」昭和五三・七）で「厨房日記」については説明したつもりであるが、「旅愁」については準備中である。

本稿をまとめる過程で気づいたことは、従来あまり研究されていなかった松尾邦之助、辻潤などのヨーロッパ観にふれて、それらの先見性を発見したことである。そのことは横光利一の「旅愁」を考えるうえで重要である。つまり、横光は「旅愁」の登場人物に、先人のさまざまなタイプを書きわけているということがみえてきたと

いうことである。それと、金子光晴が晩年に書いた『ねむれ巴里』で醒めた眼でパリ時代を回想している背景にはフランスにかかわった日本の文学者のドラマを見たうえでの見解が示されていることもわかりかけてきた。戦前と戦後の文学におけるヨーロッパ文化の問題を考えるうえで、金子光晴の占める位置は大きい。

個人では手にあまる仕事だが、日本近代文学と欧米文学、あるいはアジア文学との関係を、ひとつの国を単位として、その渡航史をまとめる仕事は、国際化時代を迎えている今日、とりわけ重要な意味があると思われる。イギリス、ドイツ、アメリカ、ロシアなどについても渡航した文学者の全体的な把握がなされなければならない。それと平行したかたちで翻訳史と日本文学の関係についての考察も必要になってくる。

（一九八六・九・三〇）

（注１）「朝日新聞」（昭和六一・五・一四夕刊、北海道版は五・一五朝刊）に「ポスト「洋行時代」のフランス観」という見出しで、黛哲郎編集委員がシンポジウムの様子を報告している。講演者は、作家・辻邦生、なだいなだ、美術評論家・東野芳明、文化人類学者・山口昌男、討論では中村雄二郎が司会者となり、講演者のほかに、日仏会館フランス学長のオギュスタン・ベルク、朝日新聞論説委員・根本長兵衛が加わった。

（注２）「読売新聞夕刊」（昭和五九・五・二）の文化欄に、詩人で仏文学者の安藤元雄が「フランスにおける日本近代詩の欠落」という文章を載せている。それによると前年（昭和五八）フランスのクセジュ文庫から、ジャクリーヌ・ピジョ、ジャン・ジャック・チュディン共著の「日本文学史」が刊行されているが、詩歌に関しては、子規、晚翠、鷗外、透谷、藤村、鉄幹、晶子、花外、啄木、それに「海潮音」と「珊瑚集」などが明治期でとりあげられ、大正から昭和の前半にかけての時期では、堀口大学、萩原朔太郎、三好達治、の三人に、

アナキスト系の雑誌として「赤と黒」が触れられているだけで、このあといきなり戦後に飛んで、「荒地」「列島」「コスモス」の詩人たちのほか、吉岡実、飯島耕一、谷川俊太郎、天沢退二郎、入沢康夫、寺山修司の六人の名が列挙してあるだけで、白秋も茂吉もないし、宮沢賢治、草野心平、西脇順三郎、中原中也の名はないそうである。

そして安藤元雄は、戦前における松尾邦之助の「現代日本詩人選集」にふれてその仕事ぶりを評価しながら、半生紀前に一流の本屋からでているこの本が、フランスの日本文学研究家に無視され、クセジュ文庫の書誌にも載っていないと書いている。

これとは別に、千葉宣一は「白秋の短歌と詩のフランス語訳」(『白秋全集』月報19、一九八六・六)で、一九一七年(大正六)十一月発行の「SIC」23号に白秋の短歌が仏訳されていることを紹介し、二十世紀の前衛主義文学運動の機関誌として不滅の意義を誇っている「SIC」が、日本フランス語フランス文学会編『フランス文学辞典』(白水社)に一切触れられていないことを指摘している。そして同誌に載った白秋と三木露風の詩の仏訳を載せ、フランスの日本詩歌研究の一端を紹介している。